



- ・7月13日は、宿泊先を出発し、約1時間30分をかけて、ヴィリニユス市からカウナス市へ移動した。
- ・そして、まず、この日最初の調査先である杉原千畝記念館へ向かった。

1 (5) 杉原千畝記念館【平和関係施策調査】

◆調査日：令和6年7月13日(土)

◆対応者：Ramūnas GARBARAVIČIUS氏(杉原「命の外交官」財団理事長)



《調査目的・概要》

杉原千畝記念館は、第二次世界大戦中の1940年、ナチス・ドイツの迫害から逃れる多くのユダヤ人難民たちに対し、外務省の訓令に背いて日本通過ビザを発給し、命を救ったとされる杉原千畝氏の功績を紹介する記念館である。1940年当時、施設の1階部分は日本領事館、2階部分は自宅として使用されていた。

「命のビザ」として日本では著名な杉原千畝氏に関連し、日本通過ビザを発給するに至った歴史的背景や、ユダヤ人難民の移動経路など様々な展示を行っており、施設を運営する財源は寄付と入場料でまかなっている。コロナ禍前は年間2万人を超える来館者がおり、8割が日本人とのこと。

今回、杉原千畝記念館における取り組みを調査することにより、本市における今後の平和関係施策の参考とするものである。

【参考】杉原千畝氏について**(1) 外交官になるまで (1900～1923)**

- ・1900年、岐阜県生まれ。父の仕事の都合で、小学校低学年のときに名古屋市中区の名古屋市立古渡尋常小学校（現・名古屋市立平和小学校）へ転入。その後、愛知県立第五中学校（現・愛知県立瑞陵高等学校、当時の第五中学校の敷地は、現在の瑞穂ヶ丘中学校）に進学。少年期の10年間を名古屋で過ごした。
- ・その後、早稲田大学に入学したが、1919年に外務省留学試験に合格し、ロシア語を学ぶ留学生として、ロシア人が多く暮らす中国東北部のハルビンへ向かう。

(2) 外交官時代①ービザ発給までー (1924～1939)

- ・1924年、杉原氏は外務書記生に任命され、1925年からハルビンの日本総領事館で働き始める。満州国外交部へ移籍したのち、日本外務省へ復帰。1937年に在ヘルシンキ日本公使館に赴任し、1939年にリトアニアの在カウナス日本領事館の領事代理となる。
(そのころ、ヨーロッパではナチスが勢力を広げ、ユダヤ人への迫害が増大していた。国外脱出を図るユダヤ系避難民は、一時避難をしていたリトアニアから、ナチスの脅威が及ばない安全な地域への逃亡を目指していた。)

(3) 外交官時代②ービザ発給ー (1940～)

- ・1940年7月18日早朝、ポーランドからリトアニアに逃亡してきたユダヤ系避難民が、ソ連によるリトアニア併合の動きから早急に国外への脱出の必要を感じ、日本領事館に通過ビザを求めて大勢殺到した。
- ・杉原氏は外務省と連絡をとったが、外務省からの命令は「発給要件を満たさぬ者へのビザの発給はならぬ」というものだった。しかし千畝はユダヤ系避難民に対し、2,000通を超えるビザを発給し、多くのユダヤ人を救った。

はじめに、杉原「命の外交官」財団理事長である Ramūnas Garbaravičius 氏よりご挨拶をいただいた後、杉原千畝氏と命のビザの発給等に関するビデオ上映を視聴した。

その後、杉原千畝記念館について現地調査を行った。その概要は、以下のとおりである。

なお、杉原千畝記念館の視察に関しては、前日に引き続き、オーレリウス・ジーカス駐日特命全権大使も同行し、ともに説明を聴取した。

<Ramūnas GARBARAVIČIUS 氏>

皆様こんにちは。皆様にお目にかかれて非常に嬉しく思っております。

この建物を所有しているのは、杉原「命の外交官」財団です。ですが、この建物は私たちのものではなく、杉原氏の建物です。というのは、私たちは皆さんとこの建物について、心からのシェアをしたいと思っていますという意味です。

毎年施設見学に来られる人数が増えており、非常に嬉しく思っています。皆様、ぜひこの杉原千畝記念館の展示物をごゆっくり見学してください。今から上映するビデオを、ぜひご覧ください。皆様に心から感謝しております。

皆様が杉原氏のように、日本に帰った後、杉原氏の功績を多くの人に伝えてくれることを期待しています。



▲Ramūnas GARBARAVIČIUS 氏

<ふじた団長>

今日はこうした貴重な機会をいただきありがとうございます。私たちは名古屋の市議員 19 名です。

名古屋には杉原千畝さんが通っていた瑞陵高校がごございます。今、瑞陵高校に「杉原千畝広場センポ・スギハラ・メモリアル」というものをつくっています。そこには杉原さんが実際に書かれたビザの記録がごございます。そのビザの記録を高校の校庭に広場をつくって展示をしております。

多くのリトアニア人の皆様が、この高校にもお越しいただいております。昨年の1月から2月にかけて、ヴィリニュス市長もこの高校を訪問しております。これまで多くのリトアニア人が、瑞陵高校に来ていただいておりますから、これからは名古屋の人たちにもリトアニアのカウナスを訪れてもらえるように、今日こうして19人の市議員と杉原千畝記念館を見学に参りました。



今日は「杉原千畝広場 センポ・スギハラ・メモリアル」のパンフレットを理事長にお渡しをしておきますので、ぜひ皆様に宣伝してほしいと思います。

ありがとうございました。仲間を代表して、お礼を申し上げます。



ご挨拶をいただいた後、20分ほどのビデオ上映があった。ビデオの内容は、当時の杉原氏の苦悩・葛藤やユダヤ人難民が日本に辿り着くまでの様子、生き延びたユダヤ人のインタビュー映像など、日本人としては感銘を受ける内容のものとなっていた。ビデオ上映の概要は、以下のとおりである。

<ビデオ上映の内容（概要）>

1939年9月、ナチス・ドイツとソ連がポーランドを占領した事をきっかけに、ポーランドからカウナスへの大規模な移住が引き起こされた。

その中にはユダヤ教神学校の生徒や教員を含むポーランド系ユダヤ人も多く含まれていた。戦争が激化する中でより安全な国へ行き着くことを模索する難民たちは、カウナス市にある様々な外国公館において、ビザを求め続けた。

当時、独ソ不可侵条約が結ばれた直後であり、杉原氏は同年の8月にカウナスで副領事に着任している。

翌年の1940年6月、リトアニアが近いうちにソ連に併合され、外国公館も閉鎖されることが明らかになる。難民たちの希望となったのは、カリブ海にあるオランダ領のキュラソー島であり、難民の行き先として浮上。当時カウナスでオランダ領事をしていたヤン・ズヴァルテンディク氏はユダヤ難民に対し、キュラソ



一島へ入る許可を出すことを決める。

戦争の猛威により欧州全体の国境が閉鎖された中、避難ルートはたった一つしか残されていなかった。ソ連を横断し日本へ渡り、そこから船を使い太平洋を渡るルートのみ。それを実現するには日本の通過ビザが必要不可欠であった。

杉原幸子著の「六千人の命のビザ」にはこう記されている。

1940年7月18日の朝、杉原夫妻はいつもどおりの朝を迎え、階下へ降りていく夫を見送り、自分は自室で本を読んでいた。

ノックの音がし、夫が入ってきた。「ちょっと窓覗いてごらん」何気なく見渡した窓の外には、建物まわりをびっしり人の群れが埋め尽くしているのです。



ユダヤ人難民の代表から、日本を通過する計画を聞いた杉原氏は、まず日本の外務省に相談せねばならなかった。

日本政府はユダヤ人を迫害しない方針をとっていたが、そもそも外国人が日本に入国する場合には、最終目的地の入国許可を持ち、日本に一時滞在するための十分な費用があることが必要とされていた。しかし難民の大部分は、この基本的な要件を満たしておらず、杉原氏は例外的措置とするよう政府への説得を試みたが、その承認を得ることはできなかった。



当時の杉原氏はその結果に苦悶し、一晩中考えたが、人道主義・博愛精神第一の結論を得た。

1940年7月29日の早朝、杉原氏は外に出て鉄柵越しのユダヤ人たちにビザを発給すると宣言。7月から8月にかけて杉原氏は休みなく働き、通過ビザを発給し続けた。ビザには手書きの記入箇所が多いため、杉原氏は手首や肩の痛みに耐え、ビザを書き続けた。

やがてリトアニアがソビエト占領下に置かれると、日本領事館を含むすべての外国公館は、活動を中止し退去をするよう命じられる。退去する杉原氏は列車に乗り込む際も、ビザを書き続けた。カウナスを離れるその時でさえ、車窓越しにビザを発給し続けた。

ビザの発給リストは 32 ページ、2,140 人の名前があった。その中には著名な人物もいる。

例えば 455 番のゾラフ・バルハフティクは戦後イスラエルの宗教大臣になった人である。難民たちは彼らが受け取ったビザが日本政府の許可なく発給されたものだったと後に知ることとなる。難民たちはカウナスからモスクワへ行き、そこからシベリア鉄道に乗り、9千キロの旅をし、ウラジオストクにたどり着いた。危険で過酷な旅の中で難民たちはウラジオストクで新たな問題に直面する。日本政府が現地の総領事館に、日本へ渡る難民の数を制限せよと命令を出していたのである。

当時ウラジオストクの総領事官であった根井三郎氏が外務省との折衝を続け、ついに全てのユダヤ人が船で日本へ向かう許可が下りる。

その航海は陰しく、荒れた海での航海であった。当時ウラジオストクから敦賀へのユダヤ人難民の移送に従事した JTB 職員が運んだ人数は 4,000 人。一度に運べる人数は限られているが、一度に 400 人以上乗ったこともあったと言う。



厳しい旅の中、ついに敦賀に到着したユダヤ人たち。敦賀の地元民は初めて見る外国人を暖かく迎え入れたと言う。その後、難民たちは神戸への旅を続けた。神戸には日常生活の支援を行っているユダヤ人のコミュニティーがあったからだ。

多くの人が神戸・横浜・東京の様々な外国公館から、新たなビザを手に入れようとしていた。駐日ポーランド大使館からの手助けもあったが、難民たちの直面した問題は通過ビザの期間が短いことであり、ビザの延長が必要となった。幸運なことに難民の一人が、小辻さんと言うヘブライ語が堪能な日本人研究者のことを思い出した。

小辻氏はユダヤ難民を助けることに同意し、関係当局との交渉を行い、その結果ビザの延長が認められた。多くの日本人の尽力により、ユダヤ人難民は救われ

た。

その後、日本を出るためには滞在に期限のない受け入れ先のビザを取得しなければならない。ポーランド政府の非常に積極的な働きかけもあり、様々な国へのビザの取得を手配することができた。

例えば、軍に入れる年齢の男性であれば、アメリカやカナダに行かせ、本人が望めば入隊ができるように。それぞれが別の国々に送られ、様々な選択肢が与えられた。

1945年以降、多くの難民は最終目的地の国を目指し、日本を離れた。

多くはアメリカへ向かったが、カナダやイスラエル、南アフリカやその他の国に渡った人もいた。その中にはユダヤ教神学校の生徒 300 人と教師たちも含まれている。



1940年、杉原氏がカウナスを離れた後、ルーマニアの捕虜収容所に入るまで、杉原一家はヨーロッパの国々を転々としていた。1947年、ついに日本への帰国が認められたが、同年6月杉原氏は外務省を離れなければならなかった。ロシア語が堪能だった杉原氏は、外務省を退職後、モスクワの貿易会社などで働いた。



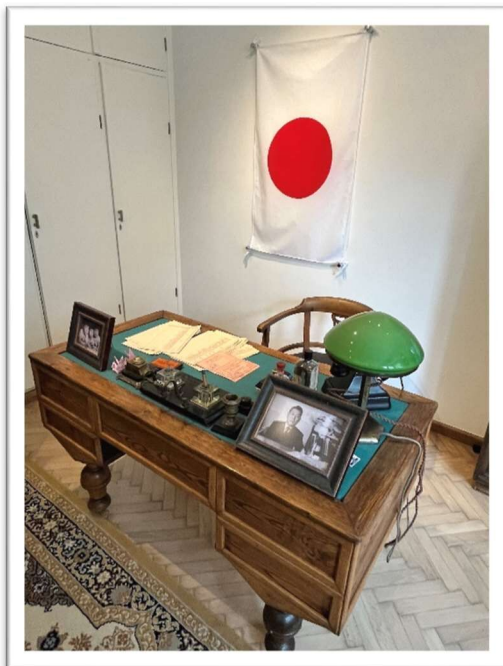
ユダヤ人難民たちは救われた恩を返すため、杉原氏を探し続けたが、それには約20年の歳月がかかった。ついに東京のイスラエル大使館で働くヨシュア・ニシャリ氏と言う人物が、1968年に杉原氏に会うことができた。1985年に杉原氏はヤド・ヴァシェム(ホロコースト記念館)から、ホロコーストからユダヤの人々を守った人物に贈られる最高の賞を受賞している。

杉原氏の勇気ある行動により、救われた人々の正確な数は明らかになっていない。

しかしリスト上のビザの数より多いと考えられている。リストに記載されたビザは、記載された本人だけでなく、その家族も含まれているからだ。リストに記載されず発給されたビザも数百枚あったのではないかとされている。

リトアニアのカウナスで、杉原氏の発給した「命のビザ」は、根井氏、小辻氏、敦賀や神戸の人々、JTB 職員、日本、リトアニア、ポーランドの様々な機関の尽力によって効果を発揮した。そして、そのビザによって数千人の難民が救われ、生き延びた人々とその子孫の数は、今や数十万に達していると言われており、その数は毎年増え続けている。

ビデオ上映の視聴後、杉原千畝記念館の現地調査を行い、杉原千畝氏が実際にビザを発給する際に使用した執務室の様子や、旧制愛知県立第五中学校（現・愛知県立瑞陵高等学校、跡地は名古屋市立瑞穂ヶ丘中学校）に関する記録などの説明を聴取した。



▲旧制愛知県立第五中学校に関する記録

◀杉原千畝氏が実際に使用したデスク



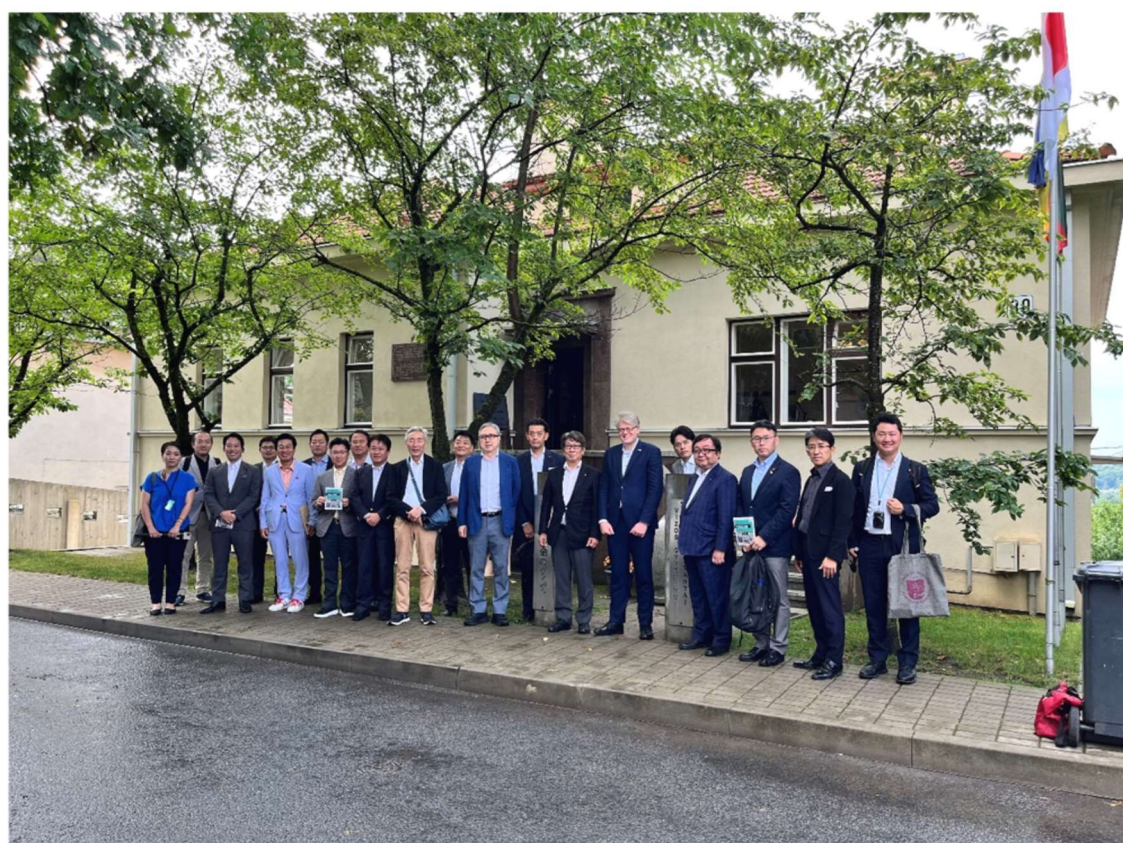
《所感・考察》

施設内には、当時執務を行った机や詳細な説明など、様々な展示がされており、当時の杉原氏の心境や、ナチス・ドイツの迫害から逃れるため、決死の思いでビザを求めたユダヤ人難民の心境に想いを馳せることができる。

我々視察団が訪れたとき、来館者はまばらで日本人の来館者が数人程度だったが、今後はより多くの日本人が実際に現地を訪れ、杉原氏の功績や人道性を知ってもらいたいと感じた。

「命のビザ」で知られる杉原千畝氏は、青少年期の約10年間を名古屋で過ごし、旧制愛知県立第五中学校（現在の愛知県立瑞陵高等学校）の卒業生でもある。

名古屋市では、杉原千畝氏の第二次世界大戦中の功績と名古屋市とのゆかりを後世にわたり市民に伝えていくことで、市民の誇り、心の財産とするとともに、他人への思いやり、命の重みなど人格形成期にある若い世代の育成を図ることを目的として顕彰事業に取り組んでいる。名古屋市瑞穂区にある旧制愛知県立第五中学校（現在の愛知県立瑞陵高等学校）には「杉原千畝広場 センポ・スギハラ・メモリアル」が整備されており、今後カウナス市との交流をより活発に行い、杉原千畝広場を大いに盛り上げていく事を期待したい。



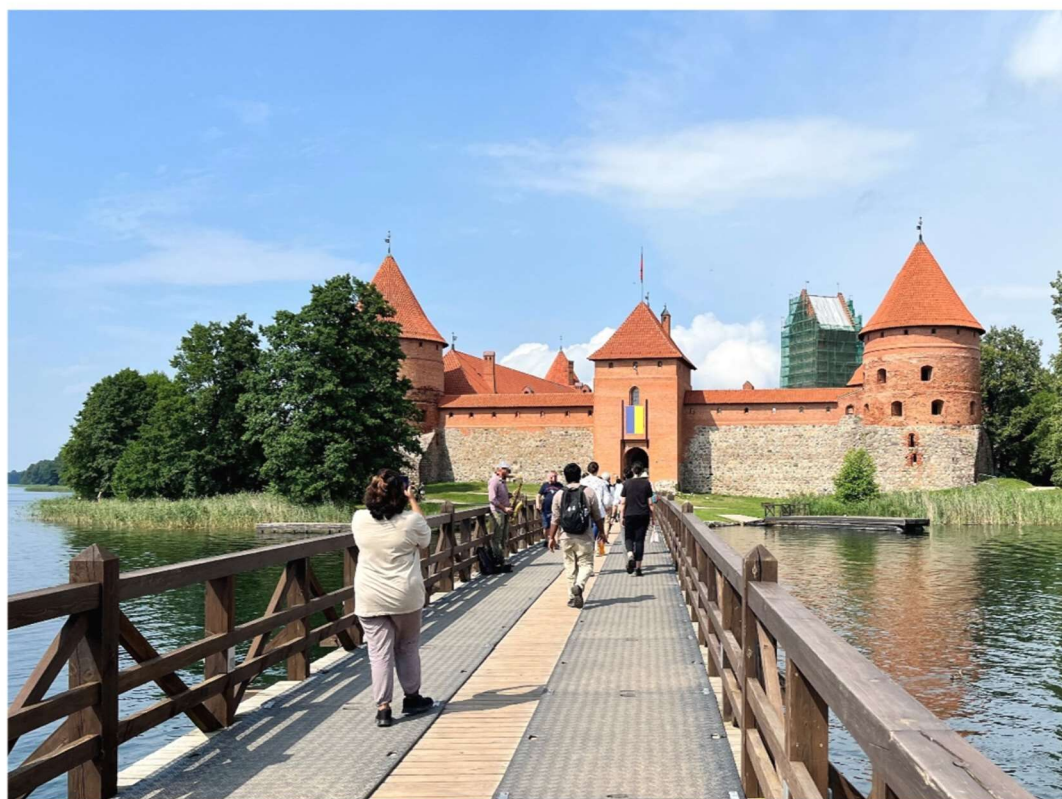


・杉原千畝記念館での調査後、オーレリウス・ジーカス駐日特命全権大使の推薦により、トラカイ島城へ視察に向かった。

1 (6) トラカイ島城【トラカイ島城視察】

◆調査日：令和6年7月13日(土)

◆視察先：トラカイ島城



7月13日は、杉原千畝記念館での調査後、オーレリウス・ジーカス駐日特命全権大使の推薦に基づき、トラカイ島城の現地調査を行った。

その概要は、以下のとおりである。

トラカイ島城

トラカイは、ヴィリニュスに移る以前にリトアニアの首都がおかれていた地域である。

トラカイの湖に建てられているトラカイ島城は、14世紀後半にチュートン騎士団(ドイツ騎士団)を防ぎ、祭事などを行うためにキェストゥテイス公とヴィタウタス大公によって建設されている。

ヴィタウタス大公の死後、権力がポーランドに移ると城は荒れ始め、18世紀末のトラカイ島城の状態は非常に悪化する。なお、トラカイ島城を損傷させたのは時間だけではなく、トラカイの住民が城のレンガや石を建材として用いたことも一因だったとのことである。

しかしながら、ヨーロッパの中で歴史的建造物や遺跡への関心が高まるとともに、リトアニア市民のトラカイ島城に対する態度も変化していく。19世紀初頭には、美しい景色、広大な湖、壮大でロマンチックな城の遺跡が多く、詩人、芸術家、科学者を魅了し始める。19世紀後半になると、ますます多くの芸術家がトラカイを訪れ、町と城の景色を記録し、図面や彫刻に描かれるようになった。

そうした中、トラカイの遺跡を保護しようとの機運が高まっていき、1990年代初頭より、城の修繕など保存に向けた取組が始まっていく。戦争が激化するにつれて一時的に工事は中断されるものの、第二次世界大戦後からまた盛んに修復が行われるようになり、1987年に、ほぼ15世紀当時の姿を取り戻すことができたという。

現在でも、再建に向けた工事は盛んに行われており、視察時においても、大公の住居が再建に向けた工事を行っている最中となっていた。

再建された城壁や本丸は、現在、博物館として活用されており、地方貴族の所持品等が展示されていた。年間50万人ほどの観光客が訪れるとのこと、城内には、建造物に影響を及ぼさないよう、PARADIS社製の、駆動部分が非常にコンパクトに収まっているエレベーターが設置されている。

「リトアニアでは、トラカイほど私たちの過去を今日まで保持している場所はない。この土地の足跡はすべて古代に関連している。」などのトラカイの過去について言及する言葉もあり、リトアニアの人々のアイデンティティを感じさせるとともに、観光地として様々な方に来ていただけるようにという現在のリトアニア人の配慮と取組も感じさせる遺跡となっていた。





- ・トラカイ島城での視察の後、ヴィリニュス市に移動し、駐リトアニア日本国大使との懇談会を開催した。
- ・懇談会では、尾崎哲大使より、リトアニアの社会経済状況等について説明を聴取した。

1 (7) 駐リトアニア日本国大使との懇談会【社会経済状況調査】

- ◆調査日：令和6年7月13日(土)
- ◆対応者：尾崎哲 駐リトアニア日本国大使



《調査目的・概要》

リトアニア共和国と我が国は、外交樹立から100年以上の長きにわたり、非常に友好的な関係を築いており、名古屋市においても、リトアニアの地で「命のビザ」を発給した杉原千畝氏が幼少期を過ごしたことが縁となり、これまでも教育・文化など様々な分野で人的交流が重ねられてきている。港湾の分野においても、本年2月にリトアニアのマリュス・スクオデイス運輸通信大臣が名古屋港にお見えになり、本国初の自動化ターミナルである飛島ふ頭南側コンテナターミナルを視察し、意見交換を行うなど、今後の関係強化に向けた取組が行われつつあるところである。

今回、駐リトアニア日本国大使との懇談会においては、官民による相互交流の絆を更に強化するため、大使よりリトアニアの情勢及び経済状況等について説明を聴取するとともに、名古屋港管理組合から承った親書をクライペダ港湾局にお渡しいただくよう依頼を行った。

【参考】リトアニアとの貿易状況等について

(1) リトアニア運輸通信大臣の名古屋港視察

- ・リトアニアのマリュス・スクオディス運輸通信大臣が、令和6年2月18日及び19日に、以下の内容で名古屋港を視察された。

2月18日(名古屋港の取組紹介)

…名古屋港はコンテナ物流におけるデジタル化や港湾における脱炭素化の取組を紹介し、クライペダ港からは水素生産プロジェクトや洋上風力発電プロジェクトについて紹介があった。

2月19日(日本初の自動化ターミナルの視察)

…コンテナを積み降ろしする作業や、自動搬送台車の活用について説明が行われた。

(2) 名古屋地域における主要貿易品(2023年実績)

輸入(リトアニア→日本)

	品名	金額(百万円)	構成比
1	家具	255	24.5%
2	酪農品及び鳥卵	250	24.0%
3	化学製品	145	13.9%
4	アルミニウム及び同合金	78	7.5%
5	石炭、コークス及び練炭	74	7.1%

輸出(日本→リトアニア)

	品名	金額(百万円)	構成比
1	一般機械	1,066	74.4%
2	ゴムタイヤ及びチューブ	110	7.7%
3	電気機器	66	4.6%
4	雑製品	55	3.8%
5	化学製品	19	1.4%

駐リトアニア日本国大使との懇談会では、尾崎哲大使より、リトアニア共和国の歴史や政治状況等について説明が行われた。

その概要は、以下のとおりである。

<尾崎哲氏>

リトアニアとヴィリニウス市については、複雑な歴史に基づいて今日がありますので、ぜひ議員の皆様にはご認識いただければということでお話しさせていただきます。

まず、最初にリトアニアの人口は 287 万人です。ラトビアやエストニアはロシア人の割合が 20%以上となっていますが、リトアニアは他のバルト3国に比べてロシア人の割合が少なくなっています。よって、対ロシアの温度差というものがあるのですが、ただその中でもヴィリニウス市はポーランド人やロシア人の割合が多くなっています。やはり近いということもありますし、ヴィリニウス市がリトアニアじゃない時もあったからということもあります。

去年は、首都ヴィリニウス 700 周年でした。ヴィリニウスという町はその前からあり、それまではトラカイが首都でしたが、ゲディミナス大公という人が、狩りをして、寝て、夢にオオカミがでてきて、オオカミがここに首都を定めると言い、首都を定めたのが 1323 年です。よって、ヴィリニウス市のマークにオオカミがあります。

同年にゲディミナス大公が色々なところにレターを発出しました。ローマ教皇やキリスト教修道会。あとは、エストニアを仕切っていたドイツのハンザ同盟の諸都市にレターを出して、ヴィリニウスにおいてよと言いました。このゲディミナス大公のレターを一生懸命アピールして、俺たちは昔からヨーロッパだったんだと言いながら、2004 年に EU に加入しました。1991 年の実質的な独立か



▲尾崎哲氏

ら13年でEUに加入したのですが、その間の13年間これを言い続けた。我々は最初からヨーロッパだと。

ヴィタウタス大公の時代にリトアニアは最大になり、そこから少しずつ弱くなっていき、1569年にルブリン合同という、ポーランドとリトアニアで同君連合となります。この時ちょっとリトアニアはまだ劣勢になっています、ポーランドに対して。

それでもまだ侵食されて、1795年にロシアとオーストリアに分割され、そこで一回国が消えています。そこから第一次大戦になるまでの、120年ぐらいは消えているんです。第一次世界大戦になって、ロシアで革命が起きてヴィリニウスも独立宣言をします。ヴィリニウス、リトアニアが独立宣言をするのですが、ドイツ帝国やソ連がやってきた。ロシアがやってきて、そのような中でポーランドにヴィリニウスを占領されました。そこから、ずっと、カウナスが臨時首都になった。

リトアニアはヴィリニウスを首都だとずっと認識していますから、法的にはずっと首都なのですが、占領されているからカウナスが臨時首都ということです。それで、赤軍が来ていろいろやっているうちに、一応リトアニアに返されたのですが、1940年の6月14日にソ連に占領されました。

それから第二次大戦が起こります。第二次大戦前夜では、ヴィリニウスはリトアニア人、ポーランド人などいろんな民族がおり、12の民族が共存していましたが、当時はユダヤ人が強かったようです。その当時、150の教会があり、その中の100がシナゴグ、ほぼユダヤ教です。現在はもうユダヤ人はほとんどいません。教会も50に減ってしまい、その内シナゴグは1つです。というのがヴィリニウスの歴史となります。そう



いう意味では、色々な意味で、カウナスと良い意味でも悪い意味でも協調関係にある。ヴィリニウス出身なのか、カウナス出身なのか。東京出身なのか大阪出身なのかとは言いませんが、それぐらいに。

ちょっとおまけですが、リトアニアの Municipalities (地方自治体) ということで、いわゆる Municipalities (地方自治体) は 60 ありまして、60 の中には地域市というものもあります。大きな市は地域市がある。だから、ヴィリニウス市とヴィリニウス地域市というものがあります。二人、市長がいます。

昨日、お会いになられたのはヴィリニウス市長さん。市長は今、社会民主党、ソーシャルデモクラシー出身で、今、国会の筆頭与党の祖国同盟は、去年の市長選挙で惨敗して、今 5 人しかいなくなりました。今度、10 月に総選挙がありますが、その時に祖国同盟はかなりまずいのではないかとはいわれているのですが、さあどうなるか。

現ヴィリニウス市長は、初めての祖国同盟出身のヴィリニウス市長ということでちょっと話題になりました。また、前回の市長選の時に、1 期は 4 年ですが、3 期を超えてはならないというルールが初めて導入されました。ですが、既に 20 年就任している市長もいます。



説明を聴取した後、尾崎哲大使と懇談を行った。

その概要は、以下のとおりである。

リトアニア及びヴィリニウスの概要

①人口

リトアニア人口：287 万人

(リトアニア人 85%、ポーランド人 5%、ロシア人 4%)

ヴィリニウス人口：59 万人

(リトアニア人 67%、ポーランド人 15%、ロシア人 10%)

②経済規模

GDP 720 億 5,000 万ユーロ (2023 年)

リトアニアにおける主な成長産業

①レーザー

リトアニアのレーザー産業の技術水準は世界的にも極めて先進的である。その起源は 60 年前の当時のソビエトからもたらされたものである。独自の技術により 1960 年代に米国に続き、世界で 2 番目のレーザーメーカーとして、国際的なレーザー産業に参入し、周辺機器を含めて産業として成長を遂げた。フェムトセカンドレーザーの全世界シェアは 10%を誇り、主要輸出先は日本とアメリカとなっている。

②バイオヘルスケア

リトアニアのバイオテクノロジー研究は医薬用たんぱく質、化学、バイオ化学分野で革新的な成果をあげるなど、中東欧で最先端を誇る。リトアニアが開発した癌治療薬「テバグラスチム」は、既存の同効果薬に比べ安価であり、世界的な評価を受けている。

また、ライフサイエンス等のヘルスケアにおいては、リトアニア政府は政策の最優先と位置付け、ライフサイエンス分野を、2030 年に GDP の 5%規模の産業に育てるという戦略目標を設定している。

③IoT 化の推進

リトアニアの IoT ソリューションメーカー「テルトニカ」は 1998 年にリトアニアのヴィリニウス市で設立され、現在、5 つのグループ会社を有するグローバル・カンパニーとして、世界 22 カ国 30 か所の拠点を有し 2,500 人以上の従業員を抱えている。「テルトニカ」の製品は 160 カ国以上で 2,700 万以上の製品が製造・出荷され、様々な分野で利用されている。

また、「テルトニカ」は 2024 年 5 月、日本で新たに「テルトニカジャパン合同会社」東京オフィスを設立した。労働人口減少や労働規制の強化による人手不足の深刻化に伴い、物流や建設、医療分野における「IoT 化」が、この課題を解決する一助となるとしている。

昨今の国際情勢が経済に与える影響**①ウクライナ戦争が産業に与える影響**

30年前までソビエト連邦の一員だったリトアニアでは、政治犯が30万人シベリアに送られるなど、今でも親戚・知人がロシア国内での生活を余儀なくされている人が多い状況から、ウクライナ戦争の勃発はリトアニアでも戦慄が走ったとされている。リトアニアでは、電力などエネルギーコストへの負担が増したとしても、また、国民負担が増大したとしてもロシア有事への備えを進めるべきとする国民が多い。

また、国防システムの強化と発展のプログラムが議会で承認され、来年から少なくともGDPの3%を国防に充てるべきとの議論が続いているほか、民間のビジネス等が国防費をGDPの4%まで増やすというイニシアティブ設置を発表している。

さらに、ウクライナとリトアニアはドローン（対無人航空機機器）をはじめとする防衛機材の共同製造につき合意したと発表しており、今後、リトアニア国内でウクライナ向けドローンの製造を開始する。

②中国による「経済的威圧」

第二次世界大戦中の1939年からリトアニアのカウナス領事館に赴任していた杉原千畝氏は、ナチス・ドイツの迫害によって、ポーランドをはじめ各地から逃れてきたユダヤ人難民たちに、外務省本省からの訓令に反して通過ビザを発給し、根井三郎氏とともに日本経由で避難民を救った。いわゆる「命のビザ」発給80周年にあたる2020年を、リトアニア共和国議会が「杉原千畝の年」と決議するなど、今でもリトアニア人にとって「人道」は強い思い入れがある。

さて、5年前の2019年、香港で中国政府の圧政に抵抗する若者が「人道主義」を掲げ、大規模デモを続けていた際、リトアニアのヴィリニウスでも、香港の民主派に連帯を示す市民集会が開催された。その会場に中国国旗を持って集会を妨害する人が乱入する騒ぎが起きたが、その中に中国大使館の職員がいたことから、リトアニア外務省は、中国が関与した妨害工作だったとして抗議した。このトラブルをきっかけにリトアニア国民の対中感情が悪化した。

その後、リトアニアから中国の大使を召還するなど、外交関係は悪化。また、中国はリトアニアとの経済取引についても停止。EU加盟国から輸出される製品に対しても、リトアニアの原材料を使った製品を中国へ輸出しないように圧力をかけ続けている。

尾崎哲大使との懇談を終えた後、ふじた団長から御礼のあいさつを行うとともに、名古屋港管理組合から承った親書をクライペダ港湾局にお渡しいただくよう依頼を行った。

なお、後日、尾崎哲大使から、親書についてはクライペダ港湾局にお届けし、クライペダ港湾局ゼネラルディレクターであるラタカス氏にご確認いただいたとの報告をいただいた。



《所感・考察》

2020年、日本とリトアニアは友好100周年を迎えた。この間の両国の歴史的接点としての杉原千畝氏の存在は、両国間の絆をより一層強固にする貴重な財産となっている。そして、それぞれの国が自由、人権、法の支配といった民主的・普遍的価値観を最大限尊重し共有するパートナーとなっている。

また、レーザー、バイオヘルスケア、IoT化の推進など、両国産業経済の結びつきも極めて強固である。近年、日本企業のリトアニアへの関心が高まっており、リトアニア企業への投資や事業開始に向けた覚書の締結などが相次ぐ中、日本経済の中心といわれる中部圏の母都市である名古屋市の役割も極めて大きい。今後、名古屋市及び近郊の企業とリトアニアの先進的な企業のマッチング等により、本市におけるスタートアップ等、新たな産業の育成・創造につなげる必要がある。

まずは、人道など同じ価値観を有する名古屋市、ヴィリニュス市の両都市間で様々なイベント等を通じて、友好関係を一層強化するとともに、産業、経済などの協力関係を推進していくことが期待される。

・在リトアニア日本国大使との懇談を終え、この日の調査は終了した。